



## 多様性と調和

## ～パラリンピック①～

現在、東京2020パラリンピック大会が開かれています。様々な障がいのあるアスリートたちが創意工夫を凝らして限界に挑むパラリンピックは、多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場です。すなわち、共生社会を具現化するための重要なヒントが詰まっている大会です。また、社会の中にあるバリアを減らしていくことの必要性や、発想の転換が必要であることにも気づかせてくれます。

先日、競泳100m背泳ぎで14歳（中学3年生）の山田美幸選手が日本パラリンピック史上最年少で銀メダルを獲得しました。そのレースのVTRを見て「あれっ？」と思ったことがありました。本当に勉強不足で恥ずかしいのですが、背泳ぎなのに、腕をかいている選手とそうでない選手がいるのです。パラリンピックでは一人一人の障害や程度によって不公平が生じないように細かくクラスを分けています。山田選手は「S2」というクラスだそうです。「S」は自由形・背泳ぎ・バタフライ（ちなみにSB→平泳ぎ、SM→個人メドレー）「2」は障害の種類と程度で、1～10は運動機能障害で数字が少ないほど障害が重くなります。一口に運動機能障害といってもさまざまで、山田選手は両腕がなく、左右の足の長さが違うのだそうです。「2」なのでかなりの重度だということが分かります。つまり、同じ背泳ぎでも、腕に障害のある人とない人が一緒に戦うこととなります。なので、『その人に合った泳ぎ方』をする必要があるのです。まさに、「創意工夫を凝らして限界に挑む」のです。沢山の努力の上に立っているのだと改めて感じ、本当に尊敬の念がわいてきました。パラリンピックの選手一人一人にそれぞれの積み重ねと物語があります。そんなところにもちょっと興味を持って観戦してみてもどうでしょうか。

私自身、パラリンピックを通して、多様性と調和、たゆまぬ努力、困難な状況でも創意工夫をするなど、沢山のことを学ばせてもらっていると感じています。

右はパラリンピックのシンボルマークで「スリーアギトス」と呼ばれています。「アギト」とは、ラテン語で「私は動く」という意味で、困難なことがあってもあきらめずに、限界に挑戦し続けるパラリンピアンを表現しています。左から赤・青・緑の三色で、世界の国旗で最も多く使用されている色ということで選ばれたそうです。（白黒印刷でごめんなさい…）

